

アルファベット音名成立期における中世の音楽理論書でのギリシャ音名の役割

吉川 文

アルファベット音名は音高を示す最も普遍的な表記法のひとつであり、文字がオクターヴ循環することによって多くの音楽を成り立たせているヘプタトニックの音組織構造を明示するものになっている。この表記法は9世紀頃に登場する実践的な音楽理論書の中で徐々に発展するが、その成立には未だ曖昧な点も多い。本研究は、この時期の音楽理論の土台となるギリシャの音楽理論の援用、特にギリシャ音名に着目し、聖歌の歌唱という実践に益する旋法論が志向される中で、それを基礎付ける音組織構造に対してギリシャ音名がどのような役割を果たしていたのかを探り、アルファベット音名成立期における音組織と音名の関係に光を当てることを目的とする。

対象としたのは、同時期の理論書の中でギリシャ音名を多用するフクバルドの『音楽論 *Musica*』(c. 885) と、複数著者によると見られる『アリア・ムジカ *Alia musica*』(c. 900) である。両者ともボエティウスの『音楽教程 *De instituione musica*』(6世紀初頭) に依るところが大きいが、ギリシャ音名の用い方にはかなり異なった方向性が認められる。フクバルドは、聖歌の旋律を具体例にしながら2オクターヴの音組織構造を組み上げた上で、そこにボエティウスを典拠とするテトラコルド構造に基づいた大完全音列を重ねる。ギリシャ音名は具体的な音高を示す以上に、音名に紐付いた記譜記号を取り込む役割を果たし、聖歌の歌唱実践に沿うものとなるよう意図されている。『アリア・ムジカ』では、ボエティウスの伝える音組織が自明のものとしてそのまま援用されており、ギリシャ音名の利用を通じてギリシャと中世の旋法論のずれが透けて見え、その後の音名表記法としてアルファベット音名が発展していくことを予感させるものとなっている。